

松尾剛次著

『中世叡尊教団の全国的展開』

追 塩 千 尋

はじめに

本書で使用されている叡尊教団とは、著者松尾氏によると叡尊を祖師とする教団で、旧仏教の改革派ではなく新仏教と呼び得る革新的活動をその特色とする。叡尊・忍性およびその教団（西大寺流、西大寺教団とも）の宗教活動に関する研究は一九七〇年代後半以降活況を呈し、今日に至っている。著者はその中でも、精力的に叡尊教団研究を推進・牽引してきた一人である。

叡尊教団についてはこれまで様々なことが明らかにされてきたが、残された課題も少なくなく、その一つが西大寺の末寺研究である。末寺研究は叡尊教団の全国的広がりの実態や叡尊・忍性没後の教団の動向などを明らかにするためには必

要とされていた作業であるが、末寺の多くは廢寺となつていることや史料の制約などもあり研究は停滞していた。そうして状況において氏は、これまでに史料の掘り起こしや現地調査を踏まえ、部分的（大和・山城・伊勢など）には末寺研究を進めており、その成果は『勧進と破戒の中世史』（一九九五年）、『日本中世の禪と律』（二〇〇三年）、『中世の都市と死の文化』（二〇一〇年、以上吉川弘文館）、『中世の都市と非人』（一九九八年、法藏館）などの著書に収録されている。本書は対象とされた国は限定されるものの、未着手の末寺について可能な限り検討を加えた大著である。

「序」と「おわりに」を除く本書の構成は次の通りである。（）の年は初出年を示す。

- 第一部 叡尊教団の社会救済活動
- 第一章 仏教者の社会活動（二〇一〇年）
- 第二章 「病」観の変遷（二〇一三年）
- 第二部 叡尊教団の本州における展開
- 第一章 河内国における展開（一）（二〇一一年）
- 第二章 河内国における展開（二）（二〇一一年）
- 第三章 紀伊国における展開（二〇一三年）
- 第四章 美濃国における展開（新稿）
- 第五章 尾張国における展開（新稿）
- 第六章 越中国における展開（新稿）
- 第三部 叡尊教団の九州における展開
- 第一章 筑前国における展開（新稿）
- 第二章 筑後国における展開（二〇一三年）
- 第三章 豊後・豊前両国における展開（新稿）
- 第四章 肥前・肥後両国における展開（新稿）
- 第五章 南九州における展開（二〇一二年）

各論稿は二〇一〇年から六年の間に執筆されていることや、「序」と「おわり」を除くと全体の半分近い六本の新稿が加えられている点で、氏の精力的な仕事ぶりが伺えよう。本書で分析対象とされた国は西日本を中心とした十四ヵ国、寺院

は末寺帳未記載の筑後淨土寺を加えて七十五ヶ寺になる。本書で中心史料としている明徳二年（一三九一年）の末寺帳記載の四十二ヶ国・二五五ヶ寺を基準とすると、本書により国

はそれらの三割三分、寺院数は三割弱が検討されたことになる。

一、本書の概要

個々の末寺研究に際して著者は、文献史料の不足を補うため原則現地調査を行い、寺院の立地環境や叡尊教団を特色づける墓所としての巨大五輪塔などの考古学遺物の実測などから得た知見などを資料としている。しかしながら、やはり文献が中心となっているので、内容紹介の前に著者が主として使用している史料について確認しておきたい。

使用史料の主なものは次の六点である。^①西大寺末寺帳（明徳末寺帳）・明徳二年（一三九二）作成。西大寺が長老の任命権を持つ直末寺である僧寺（中には尼寺もある）が寺格順に記載。國は西国中心の四十二ヶ国、寺院数は合計二五五ヶ寺（ただし末寺帳は二二八ヶ寺と記載）。三河以東の末寺は極楽寺の管理であるがそれを加えると全体で四〇〇ヶ寺ほどになり、孫末寺を加えると一五〇〇ヶ寺を越えるとされる（五三五頁）。^②西大寺末寺帳・一四五三年（一四五七年）

までの間に作成。末寺帳には二八六ヶ寺と記載されているが、実際は二七八ヶ寺で四十七ヶ国に及ぶ。^③西大寺坊々寄宿末寺帳・一四三六年作成。西大寺で行われる毎年の光明真言会に參集した末寺僧寄宿の坊ごとにその末寺を書き上げたもの。

西大寺の十五の院・室別に合計一九一ヶ寺が記載。^④西大寺光明真言過去帳・叡尊教團の物故者名簿。叡尊の師の一人である静慶（一二四三年没）から一九四九年に死去した有基房に至る七〇〇年ほどの間の物故者を歴代長老ごとの区切りを設けながら、死亡時期順に配列。第六十五代長老眞應まで一

六二一人記載。^⑤授菩薩戒弟子交名・弘安三年（一二八〇）九月十日作成。叡尊の直弟子一二二〇人記載。^⑥西大寺代々長老名・第六十八代長老俊明まで没年（俊明は就任年のみ）とともに記載。

以上の六点の史料のうち、①②③で国ごとに検討すべき末寺を上げ、④⑤⑥でそれらの末寺関係僧と彼らが関係した時期を特定し、他の史資料を補いながら末寺であつた時期やその存在形態及び諸相を描く、というのが本書を貫く基本的方法である。

次に内容であるが、「序」では一九八〇年代以降の叡尊教団研究の動向として、歴史学のみならず美術史学・考古学分野や泉涌寺系律の研究が進んだことや、若手・外国人の活躍従事していた律僧の姿を見る。

め真福寺は鑄物師集団と叡尊教團の媒介の役割を果たしているとする。

第二章は教興寺と寛弘寺が検討される。教興寺には創建以来の舍利、二mを越す巨大五輪塔、洪鐘に記載された二十三人の結衆などから叡尊教團との関係をうかがい、寛弘寺の一三一年銘の五輪塔から律寺化の時期を推定し、葬送活動に従事していた律僧の姿を見る。

第三章は紀伊国十一ヶ寺が検討される。各寺院の末寺化はほぼ十五世紀からであるが、福琳寺や遍照光院などは十七世紀まで存続していたこと。利生護国寺は行基ゆかりの寺院であることや、接待所としての機能を果たしていたこと、及び西福寺とともに西大寺様式の五輪塔に注目する。さらに、尼寺妙楽寺は地方での叡尊教團の尼の展開を考える有力な事例となること、岡輪寺は太子草創伝承を持つこと、高野山内に所在し高野山の勧進を担う寺であつた遍照光院は高野山町石五輪塔建立などの勧進活動を通じて叡尊教團と結びついた可能性があり（二二三頁）、こうした他宗派との関わりの考察が必要ともされる。

第四章は美濃国で、松藏寺・長康寺・報恩寺・小松寺の四ヶ寺が検討される。これらは概ね十五世紀前半まで末寺であったとされる。中でも小松寺に関してはベルギーの新ルーバ

などを特徴としてあげながら、全国的、トータルな視点からの教団展開に関する研究の必要性を説く。

第一部は総論的意味を持たせた論稿からなる。第一章は叡尊教團を著者の持論である官僧を離脱した遁世僧集団と規定し、その宗教活動を特色付ける葬送・非人救済・全国的な港湾管理と川・海の支配、橋・道路の建設・管理、勧進活動による寺社の修造などの諸相を論じ、第二章はその救癒活動に特化して述べる。ここで述べられたことは、第二・三部で検討される末寺が叡尊教團の末寺たることの指標とされている。

第二・三部が具体的な末寺研究である。第二部では本州における展開として、河内（十三ヶ寺）・紀伊（十一ヶ寺）・美濃（四ヶ寺）・尾張（五ヶ寺）・越中（七ヶ寺）の五カ国が検討される。

第一章は教興寺・寛弘寺を除く河内十一ヶ寺が検討される。それらの寺院はほぼ十五世紀半ばまでは末寺であったこと、交通の要衝に所在していたこと、四ヶ寺が將軍祈禱所であつたことなどを述べる。さらに、叡尊の甥である西琳寺惣持は開山ではなく二代目の長老であつたこと、生没年を一二三三（一二九四年とし、從来の一三二二年没説を正す。また、真福寺は行基ゆかりの寺でそこに行基信仰を持つ叡尊教團との関わりを見出し、寺院一帯は河内鑄物師の根拠地であつたた

ン・カトリック大学図書館及び笠間稻荷神社蔵の『大般若波羅蜜多經』の奥書から、それらは本来小松寺常住物として一

三七四年に寄付され、その後東光禪庵の所有になつたことを明らかにし、小松寺は一三七四年頃には西大寺末になつていたとされる。今後の掘り起こしにより、新たな末寺関係史料発見の可能性が示唆された注目すべき章である。

第五章は尾張国五ヶ寺が検討される。末寺であつた時期は概ね十五世紀半ばまでであるが、円光寺は萱津宿と密接な関係を有していたことや、安國寺は川や港を管理していた可能性が推測され、円満寺・安國寺の末寺化には無住や領主山田氏の協力があつたことに注意が向けられる。

第六章は越中國における展開が扱われ、七ヶ寺が検討される。概ね十五世紀前半位までは末寺であつたことや、禪興寺は放生津という港町に所在していたことから、港湾支配との関係が想定されることが注目されている。

第三部は九州における展開で、第一章は筑前国四ヶ寺が検討される。いずれも十五世紀前半までは末寺であり、大乘寺は博多津を管理していたこと、最福寺・安養院は觀世音寺の子院の一つであるという推測を踏まえ、戒壇の管理・葬送に従事していたとされる。

第二章は筑後国で、明徳末寺帳には記載がない寺院である

淨土寺について検討する。淨土寺は当初は泉涌寺末で、一四五三年以来西大寺末になり、天正九年（一五八二）頃廢寺になつたとする。そして、泉涌寺末時代は風浪神社の神宮寺であり、利生塔が設置され、筑後国府の津の役割を果していた。

第三章は豊後・豊前両国が扱われる。豊後の末寺は六ヶ寺、豊前は三ヶ寺である。豊後の末寺時期はおおよそ十五世紀後半までであった点は他国と同様であるが、西大寺との関係が永興寺は一三三八年以前から、神宮寺は仁治（一二四〇）・四三・寛元（一二四二）・四七）期辺りからと、早かつたことが特徴である。金剛宝戒寺は行基伝承を有すること、神宮寺は神宮寺浦の殺生禁断権を有していたことに注目する。

豊前の永興善寺は十五世紀半ばまでは末寺であつたことや、巨大五輪塔の遺物に注目する。大樂寺は十七世紀初頭まで末寺であつたが、十八世紀末には独立寺院となつた。宝光明寺は大樂寺長老が兼務した寺院で、後醍醐天皇の祈願寺であつたことや殺生禁断権を有していたとする。

豊後・豊前の末寺は十三世紀前半の早い時期から周防灘・大分湾など交通の要衝である海沿いに展開し、殺生禁断権を梃子に漁民を把握していたとする。

第四章は肥前・肥後で、肥前は二ヶ寺、肥後は九ヶ寺取り

上げられる。

肥前の東妙寺は弘安年中（一二七八～八八）に建立された寺で、末寺時期は十五世紀後半及び江戸時代までであるが現在も西大寺末である。関東祈禱寺となり利生塔も設置された。尼寺妙法寺とペアの寺院で、墓所石塔院には五輪塔が所在する。蒙古退散祈禱や女人救済・勧進・葬送活動など叡尊教団を特色付ける活動を行なつた寺院とされる。

室生寺は一二七五年に末寺となるが、寛永十年（一六三三）以前に離脱する。大村純忠の墓所となることにより、キリシタン寺院へ転化する。そうした点で離脱要因がわかる数少ない寺院とされる。

肥後の末寺の時期も概ね十五世紀半ばまでである。淨光寺は高瀬津を管理していた可能性があり、梵鐘や巨大西大寺様式五輪塔が所在し、妙性寺がペアの尼寺であった。他に觀音寺は緑川支流を管理していた可能性があるとする。

第五章は南九州における展開として、筆頭寺院かつ拠点寺院であつた薩摩泰平寺・日向宝満寺・大隅正国寺が検討される。泰平寺は十五世紀半ばまで末寺であつたこと、利生塔設置寺院であること、一三四〇年に五輪塔が設置され、川内川を管理していたとする。宝満寺は忍性の弟子英基により再興され、西大寺様式の光信五輪塔が所在し、利生塔が設置され

た。また、志布志津を管理しており、その際には安東蓮聖が

関与していた可能性があつたとする。正國寺は蒙古襲来時に中興され、開山は西大寺第二長老信空の弟子円秀であること、利生塔が設置され、隼人港を管理していた可能性があるとする。

二、本書の成果と課題

が明らかにされたこと。

以上により、叡尊教団の活動の広がりについての解説が、これまでの「点」から「線」、さらには「面」へと進められたことになる。南北朝以降叡尊教団は衰退していくたう実証を伴わないこれまでの印象批評的予断は、今後は改めねばならないことになろう。

こうした成果をさらに意義あるものにするために、今後著者に期待したい注文などを次に述べておきたい。

第一に、各地の末寺は概ね十五世紀くらいまでは存続していたこと、寺院によつては葬送活動、勧進活動、殺生禁断、港湾・河川の管理など、叡尊教団を特色づける活動を行なつていたことが明らかにされたこと。

第二に、末寺化に関わつた忍性を初めとする叡尊の高弟たちの活動などが明確にされ、弟子たちの動向についての新たな知見が加えられたこと。

第三に、第一・第二の成果により、叡尊教団は地域差はあつたとしても、少なくとも十五世紀までは健在で、叡尊・忍性らを特色付けていた様々な宗教活動が継続されていたこと

本書により得られた成果を上げるなら、

第一に、各地の末寺は概ね十五世紀くらいまでは存続していたこと、寺院によつては葬送活動、勧進活動、殺生禁断、港湾・河川の管理など、叡尊教団を特色づける活動を行なつていたことが明らかにされたこと。

第二に、末寺化に関わつた忍性を初めとする叡尊の高弟たちの活動などが明確にされ、弟子たちの動向についての新たな知見が加えられたこと。

第三に、第一・第二の成果により、叡尊教団は地域差はあつたとしても、少なくとも十五世紀までは健在で、叡尊・忍性らを特色付けていた様々な宗教活動が継続されていたこと

要素、継承された要素でも叡尊・忍性期と同質であるのかどうか、などの検証が求められよう。通常は祖師段階と教団化が進められた段階とでは宗教活動の質が異なり差異が生じるものであるが、著者が論じる叡尊教団の場合、その辺の動向が必ずしも明確ではないのである。著者は叡尊教団の勢力は大きかったとか（五頁）、十五世紀半ばまで勢力を保持していた（五三六頁）とされるが、「大きい」あるいは「勢力保持」の中身の明確化のためには右述の作業が必要と思われる。

その際に、特に他宗への転化や末寺からの離脱事情に関しての検討が必要と思われる。その作業も史料の制約があり困難であろうが、高野山の勧進を担う寺であった紀伊遍照光院やキリストン寺院に転化した肥前の室生寺などの事例があるので、他宗派・他宗教との競合・軋轢といった視点からの検討が必要となる。

第二に、本書では各国ごとに末寺の分布図が示されているが、その分布がどのような意味を持つていてか、という点である。これは第一に述べた他宗派との関わりの中で解明されることになるであろうし、一五〇〇ヶ余寺という末寺数は当時の寺院数全体のどの位の割合になるのか、という解明困難な問題とも連動することになる。もとより著者は今後中國・四国・関東・東北地方の展開についても検討されるとの

事であるので（五三八頁）、最終的に描かれることになる中世後期の宗教勢力地図はどのようなものなのか、期待したいところである。

第三に、末寺研究は資料的制約が多いのであるが、これまでも一定の調査は進められ、その成果は元興寺文化財研究所編『中世民衆寺院の研究調査報告書』I II IIIとしてまとめられている（一九九〇—一九九二年、元興寺文化財研究所）。

この報告書に掲載されている寺院は西大寺末ばかりではないが、三冊合計で西大寺末および西大寺関係寺院九十三ヶ寺の調査結果がまとめられている。本書でもこの報告書は利用されているがIIのみで、九州十九ヶ寺の調査結果が収められていないIIIは使用されていないようである。IIIは利用価値が高い書はあるが出回っている形跡が無く、その存在が知られていないのかどうか自体疑問がある書である。したがって、IIIが利用されなかつことは著者の責任とは言えないが、惜しまれるところではある。

第四は体裁のことではあるが、叙述に重複が多いため煩瑣さを感じることである。本書では先述したように、末寺帳を初めとする①～⑥までの六点の史料が中心的に使用されている。それらの史料について章が変わることに繰り返し説明され、典拠史料の注として示されている。そのため各章は概

して注の数が多くなり、その数が一〇〇前後になる章もある

（第二部第一章は二七一個、第三部第三章は一九〇個、第四章は二一二個など）。個々の論文段階では必要な措置であつたとしても、一書にまとめる際には「序」あたりで一括して解説し各史料の略称を定め、本文には略称で示し注とはしないことにより煩雑さを回避する手立てを講じてもよかつたのではないかと思う。

本書のような末寺研究は現地調査を伴う研究であるだけに時間がかかり、史料の制約もあり困難であることは十分理解し得る。しかしながら、著者の精力的な研究活動からして実態解明が必ずや果たされるであろうことを期待し、拙い書評を終えたい。

（A五版、五六〇頁、一一〇〇〇円+税、法藏館、

二〇一七年二月刊）

（北海学園大学人文学部教授　おいしお　ちひろ）